

# 速報 文部科学省等支援プログラム

平成28～33年度 文部科学省 課題解決型高度医療人材養成プログラム(慢性の痛みの領域)

<https://www.hosp.mie-u.ac.jp/chrpain/>



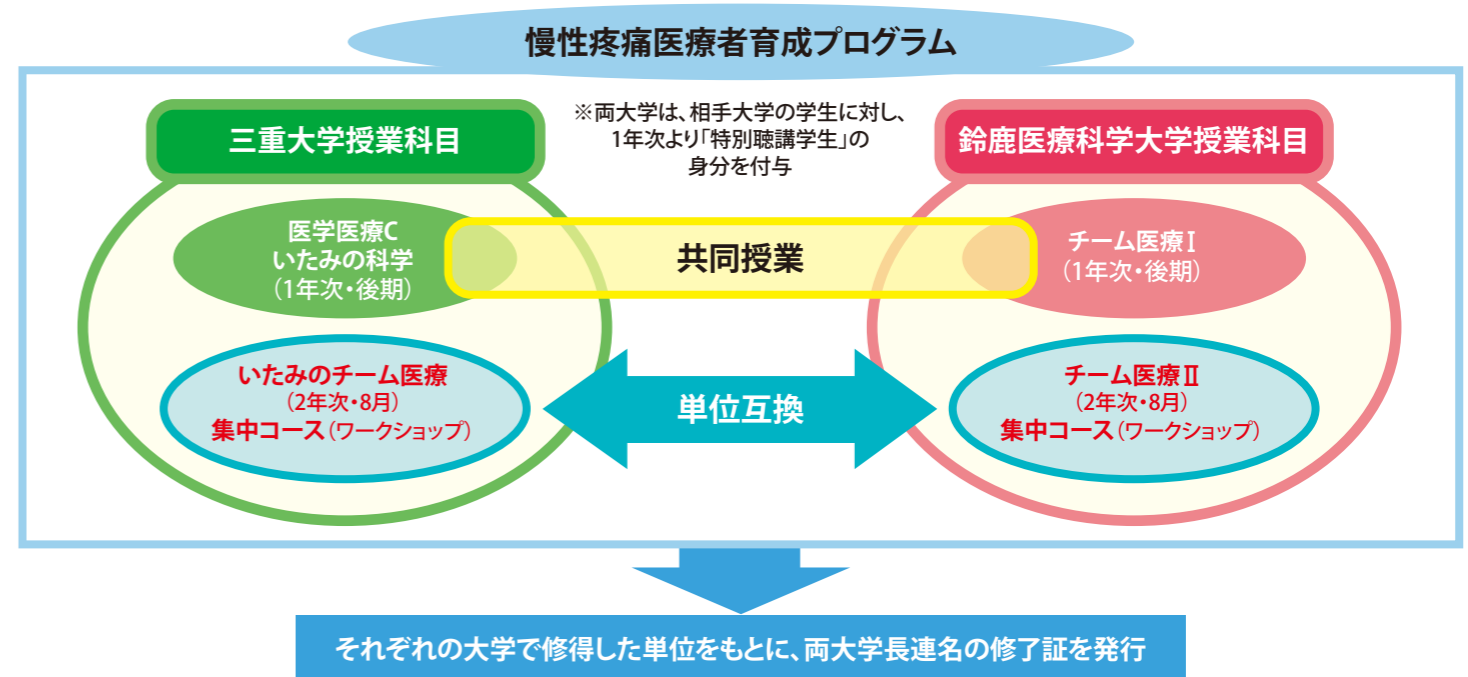
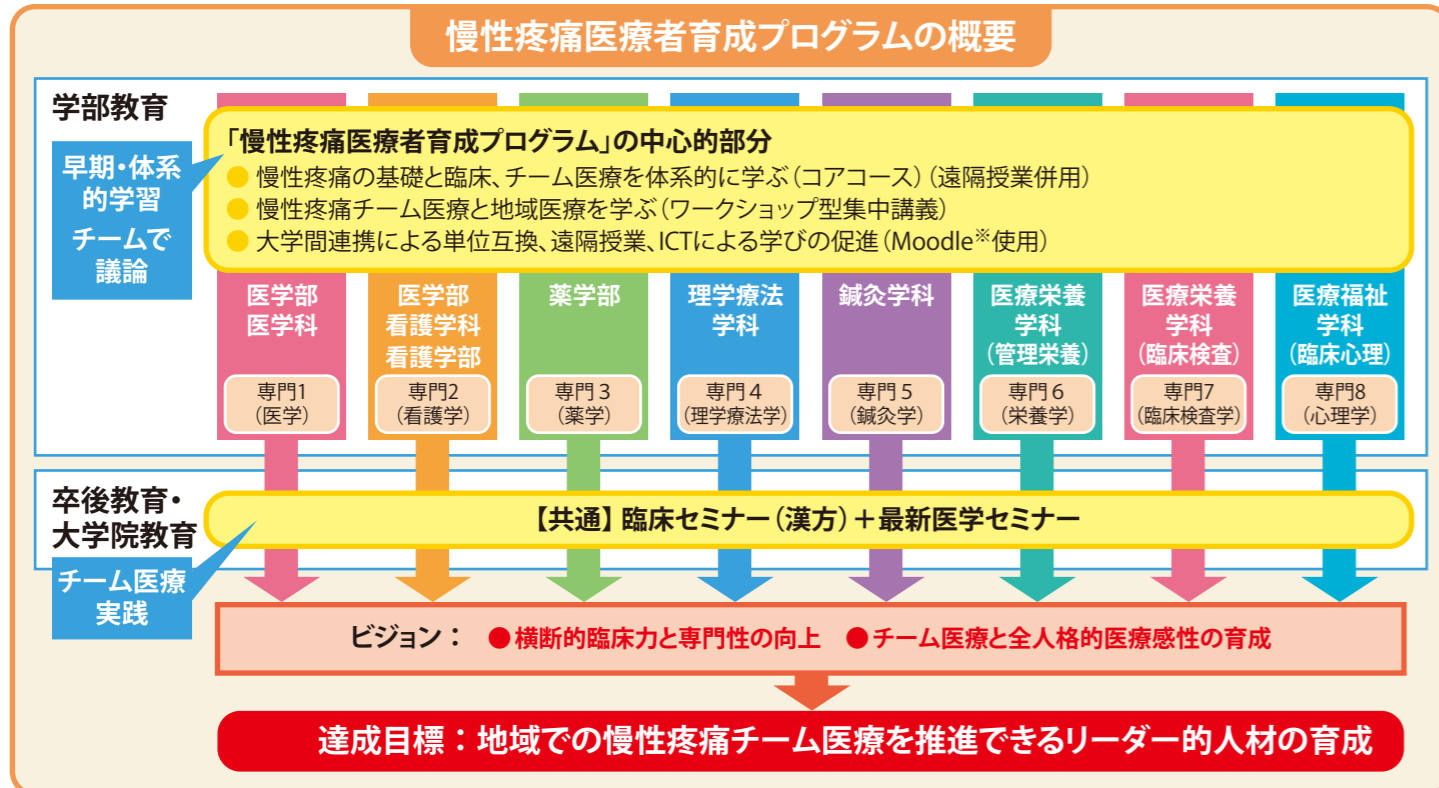
## 三重大学・鈴鹿医療科学大学合同「<sup>どうつう</sup>地域総活躍社会のための慢性疼痛医療者育成事業」

痛みは、「体で起こっているよからぬこと」を知らせる警告信号ですが、痛みの原因がなくなっても痛みが持続することもあります。3か月以上継続する痛みを「慢性の痛み」といいますが、高齢者では慢性の痛みを持つ人が多くなります。一方、若者でもケガの後に痛みが長引く人もいます。実際、その人の痛みは本人にしか分からないので、本人がどのように感じるかが大切です。心理的要素により痛みは、軽くなったり、重くなったりする側面があるのも事実です。慢性の痛みのため、日常生活や仕事に支障をきたす場合もあり、痛みそのものを和らげることは、多くの人々にとって、重要な課題です。文部科学省は、医療者としての免許を取る前の教育を中心に、厚生労働省は、免許取得以降の生涯教育を中心に、国民と社会のニーズに応える施策を講じています。文部科学省では、「課題解決型

高度医療人材養成プログラム」のテーマを毎年設定していますが、28年度のテーマは、「慢性の痛み」でした。つまり、慢性の痛みという課題を解決する、高度医療人材を養成するための卒前教育の必要性が社会のニーズとしてクローズアップされたのです。そこで、医学部(医学科・看護学科)を擁する三重大学とメディカルスタッフを養成する鈴鹿医療科学大学が合同で、応募した「地域総活躍社会のための慢性疼痛医療者育成事業」が採択されました。地域総活躍社会とは、慢性の痛みのため、仕事や日常生活に支障をきたすことなく、皆が活動できるような社会という意味です。そのような社会に貢献できるような、医療人材を学生のうちから育てるためのコースを構築しました。

「慢性の痛み」では、神経そのものが原因となっている場合があります。これに対する対策は「痛みを感じる時間そのものを少なくする」です。これにより、敏感となってしまった痛み担当の神経の感受性が落ちてきます。つまり、警告信号としての痛みの原因がないのに痛みがある場合、痛みそのものを軽減することが根本的治療となるのです。具体的には、薬、注射が念頭にうかぶと思いますが、実は、生活の工夫、理学療法・作業療法(リハビリ)、ストレッチ、鍼灸治療、心理療法、温熱療法、栄養指導(筋肉の保持)などを総合的に駆使するのが最先端の対策なのです。そのためには、各専門知識と技能

を持つ多職種によるチームアプローチが必要です。そして、チームを形成するには、知識などの共有とコミュニケーション能力が求められます。そこで、三重大学と鈴鹿医療科学大学では、医師、看護師、薬剤師、鍼灸師、理学療法士、栄養士、臨床心理士、臨床工学士などを目指す学生が、痛みに関して、学部入学早期に共に学び、修了時には慢性疼痛の基礎と臨床について理解を深め、多職種連携によるチーム医療の意義と全人的医療を身につける、系統講義および体験型集中授業を新設しました。



三重大学と鈴鹿医療科学大学を遠隔回線をつなぎ、各職種に進む学生が痛みをテーマに同じ授業を受講します。講義は各職種の専門家が担当しますが、三重大学では医学部以外の学生にも、教養教育の授業科目「医学医療C いたみの科学」を受講可能としました。この15回の講義を受けた学生に対し、翌年の夏に専門科目とし

て、3日間の集中ワークショップを行い、痛みに対する生活者としてのアプローチ(漢方・鍼灸・ストレッチ・栄養を含む)を体験し、チーム医療の基礎となるチームについて考え、多職種医療チームのシミュレーションを体験します。